

## マルクスの流通手段論：資本論・1巻3章2節

福留，久大

<https://doi.org/10.15017/4494304>

---

出版情報：経済学研究. 61 (1), pp.1-16, 1995-06-10. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：

# マルクスの流通手段論

—資本論・1巻3章2節—

福 留 久 大

## 〈趣旨〉

『資本論』第1巻第1篇「商品と貨幣」第3章「貨幣または商品流通」第2節「流通手段」におけるマルクスの流通手段論は、商品経済の事実とその事実を映し出す論理において、鋭く的確な理解を示した部分と限定的で片面的な理解に留まった部分とを合わせ持っている。しかも、この後者の部分に基づいて形成された「流通必要貨幣量」の概念が、学界における通説としての位置を占めるに至っている。第2節「流通手段」を冷静に分析することを通して、限定的で片面的な理解に留まった部分を指摘し、いわゆる「流通必要貨幣量の概念」についてその限定性片面性を明かにし、流通手段論の本来の方向を探索したいと考える。筆者は「マルクスと信用創造論」(九州大学教養部『社会科学論集』第34号=最終号、1994年所収)において同一趣旨の議論の一端を示したことがある。しかしそこでは主題である信用創造論との関係上、流通手段については部分的取り扱いしかできなかった。本稿においては、論点を流通手段論に絞ったより集約的な検討を通じて、マルクス自身の言葉によってマルクスの弱点が平明に理解されるような叙述を試みたい。合わせて参考文献について補足を加える必要がある。

## 〈構成〉

- (一)問題の状況と課題設定
- (1)誰でも知っている事実
- (2)マルクスの弱点の核心
- (二)マルクス説の論理構造
- (1)マルクスの弱点の例解
- (2)商品の命を懸けた飛躍
- (3)商品の販売可能の仮定
- (三)マルクス説の克服方向
- 四一応の結論と残る課題

## (一)問題の状況と課題設定

### (1)誰でも知っている事実

映画「汚れなき悪戯」(Marcelino, Pan y Vino, 1955)。修道院のなかで育った少年マルセリーノが、はじめて村祭りに連れられていった場面。商品交換の現実を全く知らないマルセリーノは、欲しいものは手を出して掴めばいいと思っている。広場の一角に出ている店に山積みされている果物。彼は、自らの欲求を満たすべく、ごく自然に手を出して、一つ掴んで、引き寄せる。積み上げたりんごの山が崩れて、その音で気付いた女主人が大声をあげる。「泥棒、かっばらい。つかまえて!」。驚いて、逃げるマルセリーノ。立てかけてあった梯子にぶつかり、梯子は道端の牛の群れの上に倒れる。牛の暴走によって、村祭りはめっちゃめっちゃに混乱し台無しになる。その混乱も、修道院のなかの生活しか知らないマルセリーノには、僧侶たちとの鬼ごっこ遊びと同類としか映らなかったのであろうか、彼は木に登って、すずやかな眼差しで村人の右往左往を眺めつつ、手にしたりんごを齧り続けている。

映画「ローマの休日」(Roman Holiday, 1953)。宿舎を抜け出してローマの街をお忍びで歩き回る王女が、花屋と遭遇する場面。花屋：いらっしゃい、お嬢さん。(王女に花束を差出しながら)

あなたにお似合いの花ですよ、カーネーションです。ポルディゲラからついたばかり、摘みたてです。ごらんなさい、きれいでしょ。王女：（優雅にほほ笑みながら受け取って、手を差し出す）ありがとうございます。花屋：（握手しながら）1000リラです。1000リラ。王女：（首を振りながら）ああ…お金がないんです。（彼女は花を彼に返す。）

商品経済に直接には接触しないで宮殿生活を送っている王女、さまざまの儀式で贈答行為にはなじんでいる王女、彼女は花屋の差し出した花束を贈り物だと錯覚して、返礼として握手の手を差し出す。しかし、贈り物でないと分かると、金を持ち合わせていない彼女は、花屋に花を返そうとする。大人の年齢に達している王女は、宮殿の外の商品経済の現実において、財貨を獲得するには貨幣が必要だという知識は持っていたのである。その点では、貨幣の感覚さえ持ち合わせない少年マルセリーノとは、やはり相違するのである。

「汚れなき悪戯」のマルセリーノと同じ行動は、商品経済の現実を知らない幼児の間では今日でも見かけられることだろう。しかし、「ローマの休日」の王女くらいの年齢になると、マルセリーノ的行動は、もはや後を絶って、見かけられなくなっている。モノを入手するには、おカネを差しださねばならない。そういう商品経済の事実関係を、様々の機会に教え込まれるからである。

商品を買うには貨幣が必要であるとは、いまや（頑是ない赤ん坊を別として）誰でもが知っていることである。その知識の延長上に、多少の思慮を巡らせれば、次のようなことも、誰にでも理解されることである。すなわち、貨幣はいつでもどこでもいかなる商品でも購入できる

のに対して、商品はいつでもどこでも貨幣に交換できるとは限らないという事実である。商品には、売れない可能性、売れ残る可能性が絶えず付き纏うのである。売れ残ったのでは何の意味もない、ということで売れ残りをさけるために予定価格を大きく引き下げて売らざるを得ない場合も少なくない。貨幣による商品の購買の確実性に対するに商品の販売の不確実性＝貨幣への転化の困難性は、商品経済社会に生まれ育った大人ならば、誰知らぬもののない極めて顕著な事実である。

商品に対する貨幣の優位性と表現されるこの事実が、商品経済の理論的把握をめざす経済学説の世界に一步はいると、固定観念の厚い壁に阻まれて、率直には認められないという現実が存在する。『資本論』におけるマルクスの議論を手がかりに、その固定観念の現実を見ることにしよう。

## (2)マルクスの弱点の核心

『資本論』第1巻第1篇「商品と貨幣」第3章「貨幣または商品流通」第2節「流通手段(Zirkulationsmittel)」は、三つの項から構成されている。すなわち、a)。「商品の変態(Die Metamorphose der Waren)」, b)。「貨幣の流通(Die Umlauf des Geldes)」および、c)。「铸貨、価値章票(Die Münze. Das Wertzeichen)」という三つの項である。そのなかの第二の項「貨幣の流通」の中程に、こういう文章がある。「諸商品が、われわれになじみの商品変態列、すなわち1クォーターの小麦—2ポンド・スターリング—20エレのリンネル—2ポンド・スターリング—1冊の聖書—2ポンド・スターリング—4ガロンのウィスキー—2ポンド・スターリングという列の諸環をなすとすれ

ば、そのばあいには、2ポンド・スターリングがいろいろな商品を順々に流通させていくことになる。というのは、それは諸商品の価格を順々に実現して行き、したがって8ポンド・スターリングという価格総額を実現してから、最後にウィスキー屋の手のなかで休むからである。それは4回の通流をなしとげる。この同じ貨幣片による繰り返される場所変換は、商品の二重の形態変換（一方からは商品—貨幣という売り、他方からは貨幣—商品という買い——引用者）を表し、二つの反対の流通段階を通る商品の運動（小麦を売ってリンネルを買う動き、リンネルを売って聖書を買う動き、聖書を売ってウィスキーを買う動き——引用者）を表し、またいろいろな商品の変態の絡み合いを表している。この過程が通る対立して互いに補い合う諸段階は、空間的に並んで現われることはできないのであって、ただ時間的に相継いで現れることが出来るだけである。それだから、時間区分がこの過程の長さの尺度になるのであり、また与えられた時間内の同じ貨幣片の通流回数によって貨幣通流の速度が計られるのである。前記の4種の商品の流通過程に、例えば1日かかるとしよう。そうすると、実現されるべき価格総額は8ポンド・スターリング、同じ貨幣片の1日の通流回数は4、流通する貨幣量は2ポンド・スターリングである。すなわち流通過程のある与えられた期間については、 $\text{諸商品の価格総額} / \text{同名の貨幣片の通流回数} = \text{流通手段として機能する貨幣の量}$ となる。この法則は一般的に妥当する。与えられた期間における一国の流通過程は、一方では、同じ貨幣片がただ一度だけ場所を替え、ただ一回通流するだけの、多くの分散した、同時的な空間的に並行する売り（または買い）すなわち部分変態を含んでい

るが、他方では、同じ貨幣片が多かれ少なかれ何回もの通流を行うような、あるいは並行し、あるいは絡み合う、多かれ少なかれいくつもの環から成っている変態列を含んでいる。とは言え、通流しつつあるすべての同名の貨幣片の総通流回数からは、各個の貨幣片の平均通流回数または貨幣通流の平均速度が出て来る。たとえば一日の流通過程のはじめにそこに投げ込まれる貨幣総量は、もちろん、同時に空間的に並んで流通する諸商品の価格総額によって規定されている<sup>1)</sup>。」

この一文には、問題となる点が少なくないが<sup>2)</sup>、就中、最も大きい問題点をなすもの、従って検討の焦点とするにふさわしいものは、 $\text{諸商品の価格総額} / \text{同名の貨幣片の通流回数} = \text{流通手段として機能する貨幣の量}$ という等式についての理解、「一日の流通過程のはじめにそこに投げ込まれる貨幣量は、……流通する諸商品の価格総額によって規定されている」という理解である。この理解は、抽象的な表現に圧縮すれば、商品流通（商品の動き）が貨幣通流（貨幣の動き）を規定するということになり、上にみた商品経済に特有の顕著な事実、貨幣による商品の購買の確実性に対するに商品の販売の不確実性＝貨幣への転化の困難性、つまり貨幣の商品に対する優位性という事実と反するのでは

1) Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. I. [Marx-Engels Werke, Bd. 23.] S.133-4. 岡崎次郎訳『資本論』国民文庫版、第1分冊、211-3頁(以下では、『資本論』からの引用については次のように略記する。I.S.133-4; ①211-2頁)。ただし、訳文は変更したところがある。特にここでは岡崎訳とともに流通と訳しているのを、Zirkulation = 流通、Umlauf = 通流と訳し分けた。

2) 日高普「流通必要貨幣量の等式」(法政大学『経済志林』55巻3号1-28頁、1987年)。この一編において、この等式の含む大小の問題点の丹念な解明が試みられている。

ないか。これがまず大きな疑問として浮上して来る。

「商品と貨幣とを対置してその力の優劣関係を見るならば、貨幣の側に軍配をあげざるを得ない。W-G(W=商品, G=貨幣)の形で表される商品の側からいえば販売, 貨幣の側からいえば購買において, この運動は商品所有者の決断によって実現されるわけではない。商品の所有者は彼の商品の販売を切実に望みその実現のために奔走するが, しかし自らの力でその実現を決定付けることはできない。貨幣所有者の決断によって購買が実現され, 同時にその裏面として販売が実現されるのである。商品の販売と貨幣による購買とを取り上げて, どちらが原因でありどちらが結果であるかと問われるならば, 貨幣による購買が原因で商品の販売はその結果だといっても不都合はないであろう<sup>3)</sup>。」

こういう貨幣の優位性, 貨幣の主導性の認識を堅持するなら, マルクスの「一日の流通過程のはじめにそこに投げ込まれる貨幣量は, ……流通する諸商品の価格総額によって規定されている」という見解が, 事実と反するものであることについては, おおよそその得心が得られるであろう。「いま誰かが財布からあるいは金庫から貨幣を出して, ある商品を買いたいと想定しよう。……それと引き替えに商品所有者の手から貨幣所有者の手へと確実に商品が渡される。それと同時に, 商品の取引量が増加するから, (商品の価格は一定であっても) 流通する『諸商品の価格総額』は増加することになる。逆に, ある企業が工場から商品を積みだして貨幣に交換しようとしても必ずしも売れるとは限らない

のであって, 商品の取引量をも, 『流通手段の量』をも自らの力で増大させ得る保障はないのである。商品の動き(あるいは商品流通)が貨幣の動き(貨幣通流)を決定する, という見解が必ずしも妥当しないことになる。むしろ, 逆に貨幣の動きが始点となって商品の動きを左右する場合が考えられるのである<sup>4)</sup>。」

このような貨幣の商品に対する優位性・主導性という事実と反して, <諸商品の価格総額/同名の貨幣片の通流回数=流通手段として機能する貨幣の量>という等式を巡って, 商品流通(商品の動き)が貨幣通流(貨幣の動き)を規定すると理解したマルクスは, 彼の意識のなかで「諸商品の価格総額」を独立変数として規定の側に置き, 「流通手段として機能する貨幣の量」を従属変数として被規定の側に置くことになり, 一定期間の商品流通に必要な貨幣量に関する概念(流通必要貨幣量の概念)を生み出すことになった。

第1篇「商品と貨幣」第3章「貨幣または商品流通」第2節「流通手段」b項「貨幣の通流」の残りの部分では, この規定・被規定関係の想定に基づいて, 流通必要貨幣量に関する一般的規定が, 以下のように再び三度強調されることになる。

「要するに, それぞれの期間に流通手段として機能する貨幣の総量は, 一方では, 流通する商品世界の価格総額によって, 他方では, 商品世界の対立的な流通過程の流れの緩急によって, 規定されているのである。そして, この価格総額の何分の一が同じ貨幣片によって実現されるかは, この流れの緩急によって定まるのである<sup>5)</sup>。」

3) 福留久大「マルクスと信用創造論」(九州大学教養部『社会科学論集』第34号=最終号, 1994年所収)(43)頁。

4) 前掲拙稿(44)頁。

5) *Das Kapital*, I. S. 135; ①215頁。

「流通手段の量は、流通する商品の価格総額と貨幣通流の平均速度とによって規定されているという法則は、次のようにも表現される。すなわち、諸商品の価値総額とその変態の平均速度とが与えられていれば、通流する貨幣または貨幣材料の量は、それ自身の価値によって定まる、と<sup>6)</sup>。」

商品流通が貨幣通流を規定すると、マルクスは強調した。しかし、この考え方は、貨幣の商品に対する優位性・主導性の事実と反しているのではないか。このような疑問を起点として、以下次のような問題の解明に努めたい。第一の問題。商品流通が貨幣通流を規定するという想定に基づいたために、 $\langle$ 諸商品の価格総額/同名の貨幣片の通流回数 $\rangle$  = 流通手段として機能する貨幣の量 $\rangle$  という等式を巡るマルクスの説明は、どのような弱点を生ずることになったか、マルクスの叙述に即して検討を試みる。第二の問題。そのような弱点をもたらすことになった背景、すなわちマルクスが、商品流通が貨幣通流を規定すると想定するに至った直接の事情を探索する。第三の問題。商品流通が貨幣通流を規定するという想定が弱点をもたらしたとするならば、それを克服する道をどこに求めるかを考察する。

## (二)マルクス説の論理構造

### (1)マルクスの弱点の例解

第一の問題。商品流通が貨幣通流を規定するという想定に基づいたために、 $\langle$ 諸商品の価格総額/同名の貨幣片の通流回数 $\rangle$  = 流通手段として機能する貨幣の量 $\rangle$  という等式を巡るマルク

スの説明は、どのような弱点を生ずることになったか。

上の等式は、次の三つの要素から構成されている。①「諸商品の価格総額」、②「同名の貨幣片の通流回数」、③「流通手段として機能する貨幣の量」。そして、三つの要素の間には $\langle$ ①÷② $\rangle$  = ③ $\rangle$  という関係がある。この関係式において、①の増減が原因となって③の増減という結果を導く可能性と、③の増減が起点となって①の増減に帰着する可能性と、両方向の動きの可能性が存在する、と考えるのが論理的には正しい。それに対して、マルクスは前者の可能性だけしかみていないことが、既に述べた通り彼の基本的弱点である。さらに、商品の販売は同時に貨幣による購買であるところから、この三つの要素は三者連結して分断できない性質のものである、と考えるのが事実と即して正しい。ところが、マルクスは、要素①を重視した結果、それを独立変数と考え、さらには固定数と想定することで、三者を恣意的に切断して、事実と反する理論的抽象に走ることになる。そのことが、彼の追加的弱点を成している。以上の弱点を、マルクスの議論に即して、例解しよう。

流通必要貨幣量に関する一般的規定 $\langle$ 註1)の引用部分 $\rangle$ に続けて、その例解部分において、要素①と②と③の繋がりについて、マルクスは、こう述べている。「しかし、この過程のなかでは、一つの貨幣片はいわば他の貨幣片のために連帯責任を負わされるのである。一方の貨幣片がその通流速度を速めれば、他方の貨幣片の通流速度が鈍くなるか、または、その貨幣片はまったく流通部面から飛び出てしまう。なぜならば、流通部面は、個々の要素の平均の通流回数

6) *Das Kapital*, I.S. 136-7; ①217頁。

を掛ければ、ちょうど実現されるべき価格総額に等しくなるような金総量しか吸収できないからである。それゆえ、貨幣片の通流回数が増せば、その流通する総量は減るのであり、貨幣片の通流回数が減れば、その総量は増えるのである。流通手段として機能し得る貨幣の総量は、平均速度が与えられていれば、一定であるから、例えば一定量の1ポンド紙幣を流通に投入しさえすれば、同量のソブリン貨(1ポンド金貨——引用者)をそこから投げ出すことができる。これは、すべての銀行がよく心得ている芸当である<sup>7)</sup>。」

この例解部分で、マルクスは一貫して、要素①「諸商品の価格総額」を固定して、議論を進めている。残りの要素②「貨幣片の通流回数」と③「流通手段として機能する貨幣の量」とについてだけ、変動が考えられるという枠組になっている。

(マルクスの例解部分 A)。

<①÷②=③>という関係において、①が固定されれば、総体としては、「流通部面は、個々の要素の平均の通流回数を掛ければ、ちょうど実現されるべき価格総額に等しくなるような金総量しか吸収できない」ということで、②と③とは、反対方向に増減するしかない、とマルクスは言う。

(マルクスの例解部分 B)。

部分としては、②と③とのそれぞれの内部で、一方が増加すれば他方が減少する、というわけである。②の内部については、「一方の貨幣片がその通流速度を速めれば、他方の貨幣片の通流速度が鈍くなるか、または、その貨幣片はまっ

たく流通部面から飛び出てしまう」とマルクスは言う。③の内部については、「たとえば一定量の1ポンド紙幣を流通に投入しさえすれば、同量のソブリン貨(1ポンド金貨——引用者)をそこから投げ出すことができる」とマルクスは結論づける。

(例解 A に対する批評)。

総体としては、「流通部面は、個々の要素の平均の通流回数を掛ければ、ちょうど実現されるべき価格総額に等しくなるような金総量しか吸収できない」と、マルクスは考えている。そう考えると、②と③とは、反対方向に増減するしかない、ということになる。そこで、マルクスの例解は、こうなる。「それゆえ、貨幣片の通流回数が増せば、その流通する総量は減るのであり、貨幣片の通流回数が減れば、その総量は増えるのである」。だが、商品経済社会では、貨幣はいつでもどこでもどのような商品でも購入できる。そこで、先述のように「いま誰かが財布からあるいは金庫から貨幣を出して、ある商品を買求める想定しよう。……それと引き替えに商品所有者の手から貨幣所有者の手へと確実に商品が渡される。それと同時に、商品の取引量が增加するから、(商品の価格は一定であっても)流通する『諸商品の価格総額』は増加することになる」。③が増加してそれが原因となって①の増加という結果が生じる場合である。あるいは、こういう場合も生じ得る。将来の需要増加の見通しが確実性を増してきて、いくつかの工場で原料の購買を、例えば年3回から4回に速める場合である。購買に充てられる貨幣が、流通市場外から新たに投入されるのであれば、上記のように③が増加してそれが原因となって結果として①の増加が生ずるということになる。

7) *Das Kapital*, I.S. 134 ; ①213頁。

それと異なって、流通市場を転々と通流している貨幣が新規の購買に充てられるのであれば、通流回数の増加ということになり、貨幣による購買は同時に商品の側から見ると商品の販売であって、「商品の取引量が増加するから、(商品の価格は一定であっても)流通する『諸商品の価格総額』は増加することになる」。つまり、②の増加が原因で①の増加という結果が生まれることになる。この場合の数値例は、以下に例示する。

(例解 B に対するの批評)。

③の内部での例解については、先述の、貨幣の優位性・主導性の見地を、応用すればよい。マルクスは、「例えば一定量の 1 ポンド紙幣を流通に投入しさえすれば、同量のソブリン貨をそこから投げ出すことができる」と、コップに水でも入れる調子で、言う。しかし、貨幣の投入は、商品の購買を意味するのだから、投入した貨幣額だけ流通商品量も増加するのが、通例である。マルクスの言うのと異なって、「同量のソブリン貨をそこから投げ出すことができる」とは限らないのである。マルクスの論理が通用するように見えるのは、要素①「諸商品の価格総額」を固定している観念的操作によるのである。

②の内部での例解については、どうか。「一方の貨幣片がその通流速度を速めれば、他方の貨幣片の通流速度が鈍くなるか、または、その貨幣片はまったく流通部面から飛び出してしまう」と、言えるだろうか。これもまた、全体と部分の繋がりを無視した所に生まれた誤解だと、言わねばならない。マルクスは、「貨幣片の通流回数」が他の要素に影響することなく独立に増加しうるかの如く考えている。しかし、貨幣による購買は商品の販売であることから、「貨幣片の

通流回数」の増加は、その額に相当するだけの商品売買額の増加を意味することになる。ある部分の「貨幣片の通流回数」の増加は、独立に生ずるわけではなく、対応する額の「諸商品の価格総額」の増加を招来するのであるから、他の部分の「貨幣片の通流回数」が減少すること、つまり「他方の貨幣片の通流速度が鈍くなる」ことを結果するわけではない。ましてや、他の部分の貨幣が流通手段としての機能を停止して流通から引き上げられること、つまり「その貨幣片はまったく流通部面から飛び出してしまう」ということが起こるわけではない。

(数値の例解とその批評)。

マルクスの上の例示を用いると、「1 クォーターの小麦—— 2 ポンド・スターリング—— 20 エレのリンネル—— 2 ポンド・スターリング—— 1 冊の聖書—— 2 ポンド・スターリング—— 4 ガロンのウィスキー—— 2 ポンド・スターリングという列」を構成する「前記の 4 種の商品の流通過程に、例えば 1 日かかるとしよう。そうすると、実現されるべき価格総額は 8 ポンド・スターリング、同じ貨幣片の 1 日の通流回数は 4、流通する貨幣量は 2 ポンド・スターリングである」という結果が生まれる。いま通流速度が上昇して、「1 日の通流回数は 5」となると、どういう結果になるか。4 回の場合  $8 \div 4 = 2$  とするの対して、通流回数が上昇するだけだからと考えると、5 回の場合  $8 \div 5 = 1.6$  と答えるのは、誤答である。通流回数が増加するだけではなく、同時に商品の価格総額も増加する。「1 クォーターの小麦—— 2 ポンド・スターリング—— 20 エレのリンネル—— 2 ポンド・スターリング—— 1 冊の聖書—— 2 ポンド・スターリング—— 4 ガロンのウィスキー—— 2 ポン



ド・スターリング——1台の三輪車——2ポンド・スターリング」というように列が延長されるのである。従って、 $<10 \div 5 = 2>$ が正答ということになる。「5種の商品の流過程に、例えば1日かかるとしよう。そうすると、実現されるべき価格総額は10ポンド・スターリング、同じ貨幣片の1日の通流回数は5、流通する貨幣量は2ポンド・スターリングである」という結果で、貨幣量は前と変わらないのである<sup>8)</sup>。従って「一方の貨幣片がその通流速度を速めれば、他方の貨幣片の通流速度が鈍くなるか、または、その貨幣片はまったく流通部面から飛び出てしまう」とは、言えないのである。ここでもまた、マルクスの論理が通用するように見えるのは、要素①「諸商品の価格総額」を固定している観念的操作によるのである。

こうして $<諸商品の価格総額 / 同名の貨幣片の通流回数 = 流通手段として機能する貨幣の$

8) 西村閑也「産業的流通と金融的流通——マルクスの流通速度概念の検討」(法政大学『経営志林』第17巻第1号, 1980年所収)1-2頁においても、同じ趣旨に基づいてマルクスの不備の指摘がなされている。「諸商品の形態変換の速度が緩慢になった場合のことを考えてみよう。上のマルクスの引用にしたがえば、 $V_c$ (流通手段の流通速度)が低下することになるわけであり、したがって流通必要量 $M_c$ が増大するはずである。しかしマルクス自身の設例による限りでは、そのような事は生じえないことになるのである。」「もしも商品の形態変換の速度が下って、一日の内に生じた取引は、小麦——貨幣——亜麻布——貨幣——パイプのみであったとしよう。実現されるべき価格総額は、8ポンドから6ポンドへと $3/4$ にへり、それに応じて一日の間における2ポンドの貨幣の流通回数は、4回から3回へと $3/4$ に低下する。これ故に、諸商品の形態変換の速度の低下は、分子である所の一定期間内に実現されるべき商品の価格総額と、分母である流通手段の流通速度とを、同じ方向に、同じ率だけ変化させ、したがって、流通手段の流通手段量を不変のままに維持することになる」。極めて貴重な指摘といえよう。ただ、西村教授の論考においては、ここから進んで、「実現されるべき価格総額」を独立変数と前提するマルクスの基底にある観念へと疑問と検討とを深めることはなされていない。

量>という等式についてのマルクスの説明は、極めて大きな弱点を含むことになった。第一に、貨幣の商品に対する優位性・主導性という事実反して、商品流通が貨幣通流を規定するという観念を持ち、「諸商品の価格総額」を独立変数として規定の側に置いて固定化したこと、第二に、等式を構成する三つの要素(①「諸商品の価格総額」、②「同名の貨幣片の通流回数」、③「流通手段として機能する貨幣の量」)が三者結合している事実を軽視して、恣意的に分離切断して論理を展開したことに、その弱点の胚胎を見ることが出来よう。

## (2)商品の命を懸けた飛躍

第二の問題。なにゆえに、そういう弱点が生まれることになったか。そのような弱点をもたらしことになった背景、すなわちマルクスが、商品流通が貨幣通流を規定すると想定するに至った直接の事情の探索を試みたい。『資本論』第1巻第1篇「商品と貨幣」第3章「貨幣または商品流通」第2節「流通手段」b項「貨幣の通流」におけるマルクスの叙述をここまでは検討してきた。以下、視点を転じて、同節a項「商品の変態(Die Metamorphose der Waren)」に立ち帰ってマルクスの叙述を追跡してみよう。

第2節「流通手段」a項「商品の変態」で、何よりも注目されるのは、マルクスが「商品の命懸けの飛躍」の問題を立ち入って考察していることである。ここでは、「一、商品の売れない可能性」、「二、売れるとしても実現価格が予定価格を下回る可能性」が、深刻に問題とされる。

「 $W-G$ ( $W$ =商品,  $G$ =貨幣)。商品の第一変態または販売。商品体からの金体への商品価値の飛び移りは、私が別の所で言ったように商品の命懸けの飛躍(salto mortale)である。

この飛躍に失敗すれば、商品にとっては痛くはないが、商品所持者にとってははたしかに痛い<sup>9)</sup>』と述べたのに続けて、飛躍の失敗の可能性が例示される。

「一、商品の売れない可能性」としては、まず需要との不適合の場合がある。「彼の生産物はただ貨幣においてのみ一般的な社会的に認められた等価形態を受け取るものであり、しかもその貨幣は他人のポケットにある。それを引き出すためには、商品はなによりもまず貨幣所持者にとっての使用価値でなければならず、したがって、商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されていなければならない。言いかえれば、その労働は社会的労働の一環として実証されなければならない。しかし、分業は一つの自然発生的な生産有機体であって、その繊維は商品生産者たちの背後で織られたものであり、また絶えず織られているのである<sup>10)</sup>」。従って、需要との適合の保証はなく、売れない可能性が存在するという例示である。商品の売れない可能性としては、次に供給側の競争における敗北がある。この競争に二つの形がある。一つは、類似の種類の商品との競争である。「生産物は今日は或る一つの社会的欲望を満足させる。明日はおそらくその全部または一部が類似の種類の商品によってその地位から追われるであろう<sup>11)</sup>」。二つは、同一の種類の商品との競争である。「労働が、われわれの織職のそのように社会的分業の公認された一環であっても、まだそれだけでは彼の20エレのリンネルそのもの使用価値は決して保証されていない。リンネルに対する社会的欲望には、すべての他の社会

的欲望と同様に、その限度があるのであるが、それがすでに競争相手のリンネル織職たちによって満たされているならば、われわれの友人の生産物が余計になり、従って無用になる<sup>12)</sup>。」

「二、売れるとしても実現価格が予定価格を下回る可能性」も、ぬかり無く指摘されている。「仮に、彼の生産物の使用価値が実証され、したがって貨幣が商品によって引き寄せられるとしよう。ところが今度は、どれだけの貨幣が？という問題が起きてくる。答えはもちろん、既に商品の価格によって、商品の価値量の指標によって、予想されている。商品所持者がやるかもしれない純粋に主観的な計算違いは問題にしないことにしよう。それは市場ですぐに客観的に訂正される。彼は自分の生産物にただ社会的に必要な平均労働時間だけを支出したはずである。だから、その商品の価格は、その商品に対象化されている社会的労働の量の貨幣名でしかない。しかし、古くから保証されていたリンネル織物業の生産条件が、われわれのリンネル織職の同意無しに、彼の背後で激変したとしよう。昨日までは疑いもなく1エレのリンネルの生産に社会的に必要な労働時間だったものが、今日はそうではなくなる<sup>13)</sup>。」

このような例示を以て、「一、商品の売れない可能性」、 「二、売れるとしても実現価格が予定価格を下回る可能性」を指摘したマルクスは、その事情を次のような印象的な比喩で総括する。「このように、商品は貨幣を恋い慕う。だが、『まことの恋がなめらかに進んだためしはない』 [the course of true love never does run smooth.]。 <sup>14)</sup>」

9) *Das Kapital*, I.S. 120 ; ①191頁。

10) A. a. O., S. 120-1 ; ①191-2頁。

11) A. a. O., S. 121 ; ①192頁。

12) A. a. O., S. 121 ; ①192頁。

13) A. a. O., S. 121 ; ①192-3頁。

14) A. a. O., S. 122 ; ①194頁。

マルクスは、ここで徹底して商品の売れない可能性を強調している。この商品の販売の困難性は、極めてありふれた平凡な商品経済的事実である。しかし、その平凡な事実を指摘し論理化することは、非凡の技と言わねばならないだろう。今一つマルクスの非凡さを示すのは、貨幣の力の指摘である。商品の販売が商品流通  $W-G-W$  において貨幣による購買  $G-W$  を通じて実現するのであるから、貨幣の力が重視されるべきであるが、それについてマルクスは、第3章第2節「流通手段」に先行して、貨幣の一般的等価物としての力、何時でも何物でも入手できる強い力を指摘している。第1章第3節「価値形態または交換価値」において、「一商品の等価形態はその商品の他の商品との直接交換可能性の形態 (die Form ihrer unmittelbaren Austauschbarkeit) である<sup>15)</sup>」ことが指摘される。第2章「交換過程」において、「他のすべての商品の社会的行動が、ある一定の商品を除外して、この除外された商品で他の全商品が自分たちの価値を全面的に表すのである。これによってこの商品の現物形態は、社会的に認められた等価形態になる。一般的等価物であることは社会的過程によって、この除外された商品の独自の社会的機能になる。こうして、この商品は貨幣になる<sup>16)</sup>」ことが、述べられる。いまや貨幣は「直接交換可能性の形態」となり、商品に対して優越的な力を振るい得ることが明確に示される。こういう形で、マルクス自身が一方における商品の販売の難しさ、他方での貨幣による購買の確実さを強調しているわけである。従って、この状況でならマルクスは、商品流通が貨

幣通流を規定すると想定することはなかったであろう。

### (3)商品の販売可能の仮定

しかし、この段階でマルクスは、議論の舞台を一変させるのである。すなわち、まずは商品の売れない可能性を改めて強調する。「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然にする。同時に分業は、この化体が成功するか否かを偶然にする」。そして、次に前提をまさに一八〇度逆転させる。「とはいえ、ここでは現象を純粹に考察しなければならず、したがってその正常な進行を前提しなければならない。そこで、とにかく事が進行して、商品が売れないようなことがないとすれば」と仮定するのである。その仮定に立脚すれば、自ずと結論はこうなる他はない。「商品の形態変換は、変則的にはこの形態変換で実体 (価値量) が減らされたり加えられたりすることがあるにしても、常に行なわれているのである<sup>17)</sup>。」

第2節「流通手段」a項「商品の変態」で「商品が売れないようなことがない」という特殊な前提が置かれたのを受けて、b項「貨幣の通流」において、「商品の形態変換は」「常に行なわれている」という特殊な舞台の上で論理が展開される。商品の売れない可能性の存在を直視する観点は希薄化せざるを得ない議論の仕組みである。生産されて市場に供給された商品は、売れることが約束されているという仮定になる。

そういう議論の舞台の特殊性を象徴的に示すのは、 $\langle$ 諸商品の価格総額/同名の貨幣片の通流回数 = 流通手段として機能する貨幣の量 $\rangle$ と

15) *Das Kapital*, I.S. 70; ①107頁。

16) *A. a. O.*, S. 101; ①159頁。

17) *A. a. O.*, S. 122; ①194頁。

いう等式において、「諸商品の価格総額」が、マルクスにあっては、単純な「諸商品の価格総額」ではなく、しばしば「実現されるべき諸商品の価格総額(die zu realisierende Preissumme der Waren)」として理解されているという事実である。ある期間のうちに商品として売りに出されても売れなかった分は、「流通手段として機能する貨幣の量」には何の関係もないのである。「流通手段として機能する貨幣の量」に何らかの関係があるのは、売れた(=実現された)商品の価格総額である。そう考えると、「諸商品の価格総額」を「実現されるべき諸商品の価格総額」と理解するのには、明らかに無理がある。本来のマルクスならば、こういう表現は避けたに違いない。一方における商品の販売の難しさ、他方で貨幣による購買の確実さを誰よりも強調しているのは、マルクス自身なのだから。ところが、「商品が売れないようなことがない」という特殊な前提を置いたがために、商品の販売可能が仮定され、商品の命懸けの飛躍の問題が視野から脱落して仕舞う。先出の<註1>の引用部分にも、後出の<註19><註20>の引用部分にも明らかなように、マルクスは、「実現されるべき諸商品の価格総額」という表現をしばしば用いているのである。

『「実現されるべき価格総額」という発想は、以上のように、商品経済を取り囲む現実の重要な側面を捨象した舞台の上で生じたものだったのである。出発点においては、マルクス自身が現実を離れた虚構の論理であることを承知の上で、一種の思考実験として展開した議論であった。そうでありながら、流通必要貨幣量の等式として形をなすと、あたかも現実性のある命題かの如く独立して、マルクスをも含めて多くの論者の思考を呪縛する力を発揮するに至ってい

るのである<sup>18)</sup>。』

「商品が売れないようなことがないとすれば」と仮定したマルクスは、商品は販売可能である、それに応じて流通手段としての貨幣が動く、という考え方に滑りこんでいく。そこから、次のような叙述が生み出されてくる。「商品は、その価格において、すでに決定された想像された貨幣量に等置されている。ところで、ここで考察されている直接的流通形態は、商品と貨幣とをつねに肉体的に向かいあわせ、一方を売りの極に、他方を買いの反対極に置くのだから、商品世界の流通過程のために必要な流通手段の量は、すでに諸商品の価格総額によって規定されている。じっさい、貨幣はただ、諸商品の価格総額ですでに観念的に表されている金総額を実在的に表すだけである<sup>19)</sup>。以下では、金の価値は与えられたものとして前提されるが、実際にもそれは価格評価の瞬間には与えられているのである。こういうわけで、この前提の下では、流通

18) 前掲拙稿(42)頁。「流通必要貨幣量の等式として形をなすと、あたかも現実性のある命題かの如く独立して、マルクスをも含めて多くの論者の思考を呪縛する力を発揮するに至っているのである」。この実例は、文字通り枚挙に暇ない。何十冊、何百冊を数える『資本論』の研究書解説書のほとんどにその実例を見いだすことが出来よう。その幾つかの例示は意味のないことではないが、今は何よりも筆者自身の旧稿の例を挙げるのが、至当であろう。特別の疑問を記すことなく、マルクスの流通必要貨幣量の等式について、次のような解釈を施したことがある。「このように繰り返し購買し、多くの商品の流通を媒介するのであるから、一定期間に取引される商品の価格総額に比べて、より少ない量の貨幣が通流していれば足りるし、繰り返し購買する回数が多いほど、貨幣の量は少なくて済む。『それぞれの期間に流通手段として機能する貨幣の総量は、一方では、流通する商品世界の価格総額によって、他方では、商品世界の対立的な流通過程の流れの緩急によって、規定されている』というわけで、マルクスは、次のような式を示している。諸商品の価格総額/同名の貨幣片の通流回数=流通手段として機能する貨幣の量。」(『貨幣の機能とその運動』『すくらむ』1985年12月号、60頁)。

19) *Das Kapital*, I.S. 131; ①208頁。

手段の量は実現されるべき諸商品の価格総額によって規定されている。そこで、それぞれの商品種類の価格を与えられたものとして前提するならば、諸商品の価格総額は明らかに、流通のなかにある商品量によって定まる。もし1クォーターの小麦が2ポンド・スターリングならば、100クォーターは200ポンド・スターリング、200クォーターは400ポンド・スターリング等等であり、したがって小麦の量が増すにつれて、販売に際してこれと場所を取り替える貨幣量も増さなければならないということは、ほとんど頭を痛めなくてもわかることである。商品量を与えられたものとして前提すれば、流通する貨幣の量は、諸商品の価格変動につれて増減する。流通貨幣量が増減するのは、諸商品の価格総額がそれらの商品の価格変動の結果として増減するからである<sup>20)</sup>。」

「商品は、その価格において、すでに決定された想像された貨幣量に等置されている」とか、「商品種類の価格を与えられたものとして前提する」という表現に象徴されるように、ここでのマルクスには、商品の予定通りの販売可能性が前提されている。この前提の上に立てば、商品の売れない可能性の問題は、水面下に沈んだままで浮上してこない。商品の動きが貨幣の動きを規定するという主張が、直接交換可能性を有する強力な貨幣の存在という事実、命懸けの飛躍を余儀なくされる弱い商品の立場という事実と如何に両立し得るかという問題にしても、問題として意識されることはなくなる。しかし、浮上しないとしても、意識されないとしても、問題が解消したわけではない。貨幣の直接交換可能性や商品の売れ残る可能性という事実が動

かし難いものである以上、<諸商品の価格総額/同名の貨幣片の通流回数=流通手段として機能する貨幣の量>という等式において、「諸商品の価格総額」が独立変数となり、従属変数としての「流通手段として機能する貨幣の量」を規定するというマルクス説の弱点は拭い去ることができないからである。あえて繰り返せば、「流通手段として機能する貨幣の量」や「貨幣片の通流回数」が主導して「諸商品の価格総額」を増加させ得る場合があることを指摘するだけで、その弱点のあり方は明白であろう。

### (三)マルクス説の克服方向

第三の問題。<諸商品の価格総額/同名の貨幣片の通流回数=流通手段として機能する貨幣の量>という等式におけるマルクスの解釈を克服する道はどこに求められるか。前掲拙稿「マルクスと信用創造論」は、第一に、(消極的措置として)、上の等式について「商品価格と貨幣量の関係は、 $\Sigma$ <個々の実現された(流通した)商品の価格×各々の数量>= $\Sigma$ <個々の貨幣片×各々の通流回数>という等式で表現される。この等式は、一方における商品の販売は他方における貨幣による購買であることを示す至極当然の恒等式である。したがってこの等式自体は、左辺が右辺を規定するのかその逆なのかといったことを示しているわけではない<sup>21)</sup>」という理解を示した。第二に、(多少とも積極的措置として)、次のように、資本の運動の一環として商品と貨幣とを位置付ける立場を示した。「商品と貨幣との直接の対比においては、貨幣の力が優位をしめること、貨幣が主導力を発揮して売買を始動させることは、先に見た通りである。しか

20) *Das Kapital*, I.S. 132 ; ①210頁。

21) 前掲拙稿 (36) 頁。

し、資本制経済全体については、貨幣による社会的需要の変動は商品の社会的供給を変動させずにはおかないし、そうして起こった社会的供給の変動がまた社会的需要を変動させるという相互関係が存在するわけで、単純に商品と貨幣の優位関係の視点からのみ判断することは出来ないであろう。そこにおいては、資本の一環として位置付けられた商品と貨幣が、利潤獲得運動を順調に展開し得るか否か、が重要な問題となるに違いないからである。<sup>22)</sup>

今ここにおいても、基本的方向に関してこの第一、第二の論点を動かす必要はないだろう。ただ、この論点を巡る論考については補充の必要がある。前掲拙稿においては、この論点について、宇野弘蔵博士、大内力博士でさえマルクスの誤解を踏襲されていることを指摘したうえで、「マルクスを批判し克服する立場を示す論者は、管見の限りでは、日高普教授、山口重克教授、馬渡尚憲教授、青才高志教授である<sup>23)</sup>」と記した。しかし、流通必要貨幣量の概念に関するマルクスの誤解を克服して、本来的理解のあり方を示したものとして、真実には上記に馬場宏二教授、小林彌六教授、春田素夫教授、小池田富男教授、長谷部孝司教授が付け加えられねばならない<sup>24)</sup>。さらに、流通必要貨幣量の概念の解釈を背後から左右するものとして流通手段としての貨幣を論ずる方法的立場の差異が存在するが、その点でマルクス・宇野的方法の特質と残る問題点を検討するものとして小島寛教授、大西純一教授の論考が挙げられる<sup>25)</sup>。

追加補足的に言及した論者論考のなかで、ここでは春田教授の論考にのみ若干の言及を行うことにする。「通流する貨幣の量」に関する春田教授の議論の要点を摘録すると、次の通りである。「貨幣が持手をかえる度合を、いま貨幣の流

通速度と呼んで、かりに何らかの指数で表わしうるものとする、ある期間の商品流通に必要なとされる貨幣の量は、次の関係式で書き表わすことができる。商品流通に要する貨幣量＝流通する商品の価格総額／貨幣の流通速度。 $[\Sigma(\text{それぞれの貨幣片の金額} \times \text{それが持手をかえる回数}) = \Sigma(\text{個々に売買される商品の数量} \times \text{その商品の価格})]$ 。この式は、各項の定義上、恒等的に成立しうるものであるが、もちろん、それ自体である項から他の項への因果関係を示すものではない。例えば、物価上昇は貨幣量の増大によって生ずる、とするいわゆる貨幣数量説を、

22) 前掲拙稿 (49) 頁。

23) 前掲拙稿 (38) 頁。

24) 1—山口重克「鑄貨論の問題と貨幣論の方法」(電気通信大学『学報・人文社会編』第15号, 21-50頁, 1963年)後に同『金融機構の理論』(東京大学出版会, 1984年)185-258頁に収録。

2—馬場宏二「貨幣と恐慌」(同『世界経済・基軸と周辺』東京大学出版会, 1973年)26-62頁。特に36-37頁。初出は、神奈川大学『商経法論叢』第14巻第1号, 33-67頁, 1963年, 「試論 貨幣と恐慌」。「流通必要量」についての言及は43-44頁。

3—馬渡尚憲「インフレーション理論要綱」(金融経済研究所『金融経済』184号, 45-85頁, 1980年, 口頭発表は1973年)。

4—小林彌六『経済原論』御茶の水書房, 1978年, 91-97頁。

5—春田素夫「第二章、貨幣 二、流通手段」(桜井毅・山口重克・浜田好道・永谷清・春田素夫・河西勝『経済原論』世界書院, 1979年, 58-66頁)。

6—小池田富男「貨幣と商品流通——流通手段論を中心として」(『流通経済大学論集』13巻3号, 1-24頁, 1979年)。

7—青才高志「大力・伊藤喜雄・永谷清・小湊繁・樋口均・青才高志・シンポジウム・大内力『経済原論』を検討する(上)」(信州大学『経済学論集』第21号, 85-128頁, 1984年)86-87頁。

8—日高普「流通必要貨幣量の等式」(法政大学『経済志林』55巻3号, 1-28頁, 1987年)。

9—長谷部孝司「マルクス、宇野の貨幣論と貨幣的分析」(筑波大学『経済学論究』第8号, 1-47頁, 1989年)。

25) 大西純一「流通手段としての貨幣の機能と貨幣論の方法」(東北大学『研究年報経済学』42巻2号, 21-40頁, 1980年)。小島寛「『資本論』における流通手段論(上)」(東京経済大学『東京経大会誌』第119号, 1-18頁, 1981年)。

この式自体は何ら根拠づけるものではない。」  
 「個々の売買は貨幣のイニシャティブのもとに実現されるのであるが、その貨幣は、先行の商品の売りに依存する関係にあるわけであって、単に貨幣の側にのみ、通流する貨幣の量およびその流通速度の大小、いいかえれば、流通する商品の価格総額の大小の原因を求めることはできない。もちろん、逆に、商品の側にのみ事態を決定する力があると考えうるわけではないが、流通手段としての貨幣の機能に即して見る場合には、商品交換が、たんなる流通過程の問題にとどまらない種々の事情によってその量や価格を規制されつつ行なわれるのに応じて、貨幣がその量と流通速度を変化させつつ媒介の役割を果たしうるものである<sup>26)</sup>。」

第一に、「この式は、各項の定義上、恒等的に成立しうるものである」こと、換言すれば「貨幣の側にのみ、通流する貨幣の量およびその流通速度の大小、いいかえれば、流通する商品の価格総額の大小の原因を求めることはできない」し、「逆に、商品の側にのみ事態を決定する力があると考えうるわけではない」ことが、強調されている。上記の筆者の立場からは、支持されるべきであろう。

第二に、商品でもなく貨幣でもないとするれば、商品交換を惹起する力はどこに淵源するか。「商品交換が、たんなる流通過程の問題にとどまらない種々の事情によってその量や価格を規制されつつ行なわれる」と理解されている。「資本の一環として位置付けられた商品と貨幣が、利潤獲得運動を順調に展開し得るか否か」によって商品と貨幣の交換の動きが左右されるという上

記筆者の見地に通ずるものとして、この理解に添いたいと思う。

こうした二点において、流通手段量を巡る等式について、マルクスの弱点難点を克服する方向が示されている、と言えよう。ただ一点、春田教授の叙述に瑕瑾の存在を感じる。上の等式に使用される「流通速度」という言葉である。「貨幣が持手をかえる度合を、いま貨幣の流通速度と呼んで、かりに何らかの指数で表わしうるものとする」と、明確な定義が与えられているので、この定義に従うかぎりでは、不都合はない。しかし、一般的には、「速度」とは「単位時間に通過する距離」(『広辞苑』)であり、<距離/時間>で表わされる。上の等式では、そもそも「ある期間」が前提されているのであって、さらに「時間」で割算する必要はない。必要がないと言うより余計である。その点を考慮すれば「通流回数」に変更するのが適当であろう。

#### 四一応の結論と残る課題

『資本論』第1巻第1篇「商品と貨幣」第3章「貨幣または商品流通」第2節「流通手段」は、a)。「商品の変態」b)。「貨幣の通流」c)。「铸貨、価値章標」の三つの項から成る。ここでは、c項「铸貨、価値章標」には、全く言及できなかった。「マルクスの流通手段論」という表題からすると、この部分は明らかに残された課題である。

検討できたa項、b項に関しては、次のような諸点を明らかにし得た。a項においてマルクスは、商品経済の事実的に的確に即して、「商品の命懸けの飛躍」、商品の販売の困難性を強調している。この強調は、実に至極当然の正しい行為であるが、ありふれた事実で意識に上らない事柄についてだけに、強調に過ぎるということは

26) 桜井毅・山口重克・浜田好道・永谷清・春田素夫・河西勝『経済原論』62-3頁。

ないであろう。b項では、マルクスは、〈諸商品の価格総額／同名の貨幣片の流通回数＝流通手段として機能する貨幣の量〉の等式において、a項で強調した商品の販売の困難性という事実を無視するかのように、一方的に商品流通が貨幣流通を規定すると観念している。マルクスが「現象を純粹に考察しなければならず、したがってその正常な進行を前提しなければならぬ」と考え、「商品が売れないようなことがない」とすれば「商品の形態変換は……常に行なわれている」という仮定で議論を展開したことが、この観念を生み出す直接の事情だ、と考えられる。つまり「商品の命懸けの飛躍」を否定して商品の販売の可能性を前提して議論を展開したために、生産され市場に供給された商品は販売を約束されていることになり、「諸商品の価格総額」が「流通手段として機能する貨幣の量」を規定するという観念が生じた、と考えられる。

ただ、何故に、マルクスが「現象を純粹に考察しなければならず、したがってその正常な進行を前提しなければならない」と考えたのか、「商品が売れないようなことがない」とすれば「商品の形態変換は……常に行なわれている」という仮定を置いて議論を展開することになったのか、という論点には、ここでは立ち入れなかった。この論点の解明も、今後の検討課題である。マルクスは、「商品価格は流通手段の量によって規定され、流通手段の量はまた一国に存在する貨幣材料の量によって規定される、という幻想<sup>27)</sup>」、いわゆる貨幣数量説の批判を志して、貨幣数量説と反対に「商品」の側に規定要因を求めることになったのではないかと推定される。この推定が根拠を持ち得るか否か、「マルクスと貨幣数量説」の関係を検討することが求められる。さらに遡ると、第1章「商品」に

において、商品の価値について「価値の大きさはどのようにして計られるか?、それに含まれている『価値を形成する実体』の量、すなわち労働の量によってである<sup>28)</sup>」というように、商品価値の実体規定を与えたことが影響している、と考えられる。それによって第3章「貨幣または商品流通」に入っても、商品の価値を独立変数として固定して把握する観点が、マルクスの思考の底流に強固に存在しており、それが「商品」の側に規定要因を求める姿勢に繋がっている、と推定されるのである。例えば、第3章第1節「価値の尺度」において、マルクスは、「商品は貨幣によって通約可能になるのではない。逆である。すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自体として通約可能だから、すべての商品は自分たちの価値を同じ独自の商品で計ることが出来るのであり、またそうすることによってこの独自の商品に共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである」として、価値尺度機能は「商品世界に対して価値表現の材料を提供し、または商品価値を質的に同一で量的に比較され得る同名の大きさとして表示する<sup>29)</sup>」ことにあるとして、「想像されただけの観念的<sup>30)</sup>」存在で足りる、と言う。こうした形で、実物面を重視し貨幣面の軽視を誘引する観点が強い力を及ぼしている、と推定される。この推定を巡っては、「価値の尺度と流通手段」の関連が「商品の命懸けの飛躍」と「貨幣の直接交換可能性」とを念頭において、改めて検討されなければならない。

27) *Das Kapital*, I.S. 137; ①217頁。

28) A. a. O. S. 53; ①78頁。

29) A. a. O. S. 109; ①171頁。

30) A. a. O. S. 111; ①173頁。



商品価格と貨幣量との関係は、本来的には、  
 $\Sigma<\text{個々の実現された（流通した）商品の価格}\times$   
 $\text{各々の数量}>=\Sigma<\text{個々の貨幣片}\times\text{各々の通流}$   
 $\text{回数}>$ という恒等式として、各項の間にいずれ  
 の方向の因果関係をも含まないものとして、理  
 解すべきであって、「諸商品の価格総額」が「流  
 通手段として機能する貨幣の量」を規定すると  
 いうマルクスの解釈は、克服されるべきであろ  
 う。その克服方向としては、先に「消極的措置」  
 と「多少とも積極的措置」とを挙げたが、「多少  
 とも積極的措置」の解明を進め、「さらなる積極  
 的措置」へと具体化することも、残る課題であ  
 る。前掲拙稿においては、「商品と貨幣の優位関  
 係の視点からのみ判断することはできない」こ  
 と、「資本の一環として位置付けられた商品と貨  
 幣が、利潤獲得運動を順調に展開し得るか否か、  
 が重要な問題になる」ことを指摘して、「現実資  
 本の再生産過程およびそれとの関連における銀  
 行資本の運動を考慮することが、活路に繋がる  
 のであろう」と、述べた<sup>31)</sup>。残る課題という観点  
 から、一言ずつ追加する。「現実資本の再生産過  
 程」を考慮することは、景気循環過程に即して  
 産業・商業資本の投資行動を解明することを意  
 味し、「銀行資本の運動を考慮すること」は、再  
 生産過程の進行に独自の影響力を及ぼすもの  
 としての信用の動向、その信用機構の中核とし  
 ての銀行資本の信用創造の変転を景気循環過程  
 のなかで解明することを意味するであろう。「マル  
 クスの流通手段論」における弱点の克服は、最  
 終的にはこのような延々たる道程の踏破を必要  
 とするのであろう。(1994・12・28)

31) 前掲拙稿, (49)頁。